

相見文庫蔵『新書画展観目録』翻刻と解題(下)

田邊, 菜穂子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8969>

出版情報 : 文獻探究. 42, pp.93-107, 2004-03-31. 文獻探究の会
バージョン :
権利関係 :



相見文庫蔵『新書画展観目録』翻刻と解題（下）

田邊 菜穂子

前号に続いて、九州大学文学部図書室相見文庫蔵『新書画展観目録』を翻刻・紹介する。

一 近世末期の新書画展観

同じく相見文庫の蔵書である『皇都書画人名録』（相見文庫／和／64）の裏見返しに、次のような広告がある（引用に際しては、句読点・濁点を私に付した）。

四方ノ君子筵上書画ヲ希フ。尤、掛画・御出作題図、春三月中・秋九月中、御所書・御姓名ト御認、御差出し可被下、當日、目録摺出し申度候。掛書画一幅ニ壺匳づゝ、目録彫刻料一幅毎ニ五分、合壺匳五分ヅ、申請度候。會前リ日迄ニ集所へ御出し奉希上候。浪花表ハ四月五日、十月五日迄ニ御差出し可被下、其外、遠境御方、右日限迄ニ飛脚相届候様、御申付奉願上候。以上

つまり、書画会出品の際に住所や名前を書かせておいて、本稿で紹介しているような目録に仕立てて、会の当日に配布していたのである。書画会への出品料は、目録掲載料とあわせて一幅につき一匳五分であった。文中にある「集所」とは出品する書画を預かり管理するところであったのだろう。この文の後に表具師など京坂の六件が名を連ねている。

さらに書画募集文の上方には、「今書画展観 四月十日不論晴雨於円山正阿弥」とある。「今書画展観」であるから新書画展観が開かれたわけであるが、その会場は前号で紹介した円山安養寺内の、勝興庵正阿弥であったことが知られる。

この『皇都書画人名録』は弘化四年（一八四七）の序文を有するが、刊記はない。したがって、ここにいる書画会が実際に開催されたのかは判然としない。また、「今書画展観」の開催場所は京都東山であるが、書画会への出品を願う文は、明らかに大坂に住まう者に向けたものである。よって、この書画会が、皆川淇園が始めた新書画展観のその後の姿かどうかまた、分らない。しかしながら、近世後期から末期における、新書画展観の様子を垣間見ることができる一資料であ

るから、ここに挙げておく。

二 文化三年春展観目録及び文政八年秋展観目録解説

さて、前回紹介したのは、寛政八年、九年の書画展観目録であった。今回は、残りの C 文化三年春展観目録、D 文政八年秋展観目録を翻刻する。についてはそれぞれについて、少しく解説を加えたい。

(1) C 文化三年春展観目録

C 文化三年春展観目録は、同年（一八〇六）二月十二日、大坂北野大融寺で行われた展観の目録である。

主催者は、「君山宮瓊」こと画家・宮本君山（生年未詳）文政十年（一八二七）。『国書人名辞典』などに拠ると、備中倉敷の人であった君山は、十五年ほど各地を旅した後、享和四年大坂に至り、心斎橋瓦町北に住したそうであるが、本書の住所欄には「両替町四丁目」と記載されている（18丁ウ）。君山が遊歴中に知己となった人々に出品を依頼したのか、本展観には諸国の名家の名前が見える。

序文は大坂の漢学者である「三島篠應道」、すなわち篠崎三島。その末には「文化乙丑冬」とある。文化乙丑とは文化二年のことであるから、この序文は少なくとも展観当日より二ヶ月以上も前に用意されたものとわかる。三島は六十九歳の高齢であったが、序文のほか、展観に自作の詩を出品している。また目録中、三島の隣には「同南豊」、養嗣子である篠崎小竹の名前もあり、三島と同じく行書自作詩を出品

している。

この書の構成について述べておきたい。まず、巻頭に各地の著名な画家や書家の作品を据える。次に当地「浪花之部」が始まり、これより丁付けを改める。一丁から六丁までは順番に丁が移っていくのであるが、六丁の次は「七七」、その次は「七リリ」そして「七」となり「八」丁で目録は終わる。その内容を見てみると、「七」丁裏より「浪花近在之部」として三作品を掲載した後、「會補」（九作品）となる。なお、八丁裏末、つまり目録の最後に載せられているのはこの書画会的主催者である君山の「楚蓮香圖」であるから、実質の「會補」は八作品である。

かくのごとき丁付けの乱れは、八丁末まで目録が完成してしまつてより後、何らかの理由で遅れて出展が決まつた二十二点の処理によるものと思われる。

寄せられた作品を出品者の地域別に順序良く並べ、彫りすすんでいくと、目録出来上がり寸前に八作品寄せられた。仕方ないのでそれを「浪花近在之部」の後に「會補」として掲載した。最後に君山の名前を入れ、目録は完成。ところが、そのあと、二十二点も追加が決定した。目録には入れなければならないが、既に巻末には君山の名前が彫られている。追加分とは言え、主催者の名前より後に掲載するのは不都合であるから、やむなく「浪花近在之部」の前、つまり「七」の前に入れ込むこととなった。そして苦し紛れに「七七」「七リリ」と丁付けした。この二丁に摺られた文字は、ほかの丁の整然とした文字とは異なっており、お世辞にも美しいとは言えない。また「七リリ」丁裏は、目録掲載作品数の都合上、二行分が空白となることとなった。本来なら罫線だけは彫ってにおいて、二行分の枠の中は空欄にして置いた

方が見栄えが良かろうと思うのだが、その罨さえも刻まれておらず、墨摺りで黒く塗りつぶされた状態。いかにもあわてて用意したといった風情である。

追加された二十二点のうちには、展観会場である大融寺前に住すものも見えるから、あるいは展観が開催されることを耳にして、急遽出品を思いついた者もあるのかもしれない。また、先述した篠崎三島の序文が早々に用意されていたことから推し量れば、あまりにも早くより展観の準備が進んでいたために、直前の追加・変更に対応できなかったということも考えられる。

それにしても、同じ彫師に注文するわけにはいかないものなのだろうか、少々不思議に思わないでもない。

(2) D 文政八年秋展観目録

文化十年（一八一三）十月二三日、奥文鳴没。京都昌福寺に葬られた。奥文鳴とは、言わずと知れた円山派の画家で、応挙十哲に数えられる人物。Dは文鳴の十三回忌追善展観目録である。

ところで、本書は前号でも記したように合冊で、後補の表紙がつけられており、その表紙に「新書画展観目録／寛政八年外四回分／并文鳴十三回忌展會記／芳斉日記添フ」と墨書されている。その中身は、これまで紹介してきた、A 寛政八年秋展観目録（板本）・B 寛政九年春展観目録（板本）・C 文化三年春展観目録（板本）と、Dである。

このD 文政八年秋展観目録は他の三種と異なり、写本である。目録部は楷書、その後に続く劣齋の文章はやや崩した字体で記される。なお、合綴の際に付された表紙にいう「芳斉」とは「劣齋」を誤読し

たものと思われる。

この目録部と劣齋文章とは同筆であろうか。その文字より判断することは難しい。同じ手によるものではない場合に問題になるのは、目録部と劣齋文章が同じ展観に関するものなのかどうかである。

目録部には、内題に「追薦展観畫目」とあるのみで、展観の日時を示す表記は見当たらない。一方、劣齋の文末には「文政八年立冬日」と明記されている。

劣齋の文によれば、乙酉すなわち文政八年（一八二五）冬は文鳴十三回忌にあたる。よって、九月一七日、劣齋姪である文燠や門下達が多福庵で追善展観を開いた。展観に際しては、各地より新書画を求めた。その求めに応じて寄せられた作品を、目録として纏めることによつて、感謝の念を示そう、というわけである。

文鳴追善の展観であること、そして主催者が文燠であることなど、ここに書かれている内容は、目録部と齟齬しない。

なお、展観出品者のうちで、文政八年以前に没したものを探せば、同五年に落命した八田古秀が挙げられる。目録14丁裏に掲載されたこの作品は、円山応瑞、円山応震、森徹山、呉景文、岡本豊彦、八田古秀、河村文鳳と派を超えた七名による合作「合作花鳥紙本 潤幅」で、これは文鳴七周忌（文政二年）追善の折に作成したものであるというから、問題はない。

その他に没年の明らかかなものを探すと、円山応瑞や矢野夜潮などをもっとも早いところであるが、それでも文政十一年、二年といった頃である。文政八年より前に没した者は、管見の限り、見つからない。

目録部と劣齋の文章が別筆かどうかは今判然としませんが、どちらも文鳴十三回忌追善展観のものと考えておく。

なお、追善展観が開催された多福庵とは、書画会の開催場所として頻繁に利用されている円山安養寺内、多福庵也阿弥のことである。

さて、文鳴について。奥文鳴。姓源、字萬禪・伯熙、名貞章、号文鳴・栖霞・陸沈斎、称順造。寛政六年刊『源平盛衰記図会』や同一年刊『都林泉名勝図会』などに絵を挿すほか、応挙の伝記『仙斎円山先生伝』を著してもいる。また狂歌も能くした。その伝記には不明な点が多いが、京都文化博物館十周年記念特別展『京の絵師は百花繚乱』の図録中の「画家解説」に従えば、寛政度御所造営の願書には医師奥道栄の子・奥源次郎という名で記録に残るという。

目録の後に付された文は劣齋奥之基によるものであった。「劣齋奥之基」とは、医師である奥劣斎（安永九年（一七八〇）～天保六年（一八三五）、五六歳）。名之基・基、字士讓。通称道逸、号劣斎。京都の医師奥道栄の息子である。

寛政度御所造営の願書に記された文鳴の伝記が正しければ、文鳴と劣斎は兄弟ということになる。

また、劣斎の墓所は、文鳴と同じ昌福寺内であり、『京都名家墳墓録』によれば文鳴の南三基目に位置する。更に劣斎の文にも「先兄文鳴」と記されていることより考えても、やはり二人は兄弟なのである。さすれば、兄の没した文化十年には、安永九年生の弟は三十四歳であつたはずだから、文鳴の年齢もそこから推して知られる。

最後に、この会の主催者であつた「奥文燠」という人物についてであるが、劣斎の文中に「姪文燠」とあること、そして、目録中の文鳴遺蹟三十三点が掲載されている箇所の最後に「月下秋草^{綱本} 叔氏劣齋題詩」とあることから推察すれば、文燠と劣斎とは叔父・甥の関係であつた。

要するに、文燠という人物は、文鳴の息子なのであろう。文燠については、これ以上のことを詳しく知らないのですが、ご教示を願う次第である。

翻刻に際しての凡例は前号に従った。

三 翻刻

（C）文化三年春展観目録

（1）書誌

書型	縦一四・三糎 横八・八糎
表紙	原表紙。共紙表紙。
外題	「新書画展観款録 初編」（単梓・中央やや左寄・刷り）
構成	全二〇丁（序一、本文一八丁、跋一丁）
見返し	無し
序文	「文化乙丑之冬 三島筱應道撰」
跋文	「浪華君山宮瓊識」
匡郭	四周单边（縦一二・五糎 横六・四糎）
罫	有り
板心	「一（〽八）」
丁付	・序文：なし

・一〇八

・浪花之部一〇六、七七、七〇〃、八

・跋文：なし

挿絵 無し

備考 「三樂」(序表 墨刷・陽・楕円 縦一・〇糎 横〇・七糎)

「三島」(序裏 墨刷・陰・長方 縦一・四糎 横一・〇糎)

「應道」(序裏 墨刷・陰・長方 縦一・四糎 横一・〇糎)

「君」(跋裏 墨刷・陰・方 縦〇・七糎 横〇・八糎)

「山」(跋裏 墨刷・陰・方 縦〇・七糎 横〇・八糎)

(2) 翻刻

新書画展觀款録 初編

「表紙

「見返し

序 刷印〈三樂〉

在昔邈矣自雪舟周文之徒以

来善書畫者經歷浪華其跡往〃

存焉方今昇平之久名手輩出屬

君山畫殘為書畫會於北野太融

寺也於斯為卷濟〃多士不可猶記故

収録畫題為小冊以頒好事者集

同蓼蟲之嗜因書其卷首

文化乙丑之冬

三島筱應道撰

刷印〈三ノ島〉 刷印〈應ノ道〉

「序ウ

丙寅春二月十二日於北野大融寺新書

画展觀款録 初編

浪華 君山宮瓊輯

紅毛画 江戶 石川大浪

着色花鳥圖 同 小栗東閣

淡彩山水圖 同 春木南湖

長松晴雪圖 同 谷文晁

行書 同 甲賀山人

蠻書 横文 奥州仙臺 大槻玄閑

双鶴圖 同 東駿

自作詩 駿府 山田渤海

六歌仙圖 社人 千家清足

春郊牧馬圖 伊与 清家春洞

花鳥圖 和島 僧常山

烟林春景圖 南勢古 大原吞響

蘭亭圖 市 僧月僊

草書 同 山寄東塾

青山烟雨圖 同山田 左々龍丘

草書 同 奧本百齋

同 杜子美山 左々鳳丘

雲溪泊舟圖 紀州若 呂介石

墨竹圖 同 西石鸚

行書 同 田龍江

着彩花鳥圖	同	崖南嶠	┌ 2ウ	芍藥春鳥圖	同	龍適齋	
石畔老年圖	同	沼野南丘		樵漁問荅圖	同	岡村鳳水	
紫陽花圖	同	僧松丘		五所子圖	同竹川	月潭	
朱竹	同	前田世美		草書	同松坂	米南山	
老子出關圖	同	蘆原		柳陰漁父圖	京	柴田義董	
自刻印紙	同	藤江求古		溪山朝靄圖	同	福島關山	
春雨洗錦圖	同	中井梅園	┌ 3才	福祿壽圖	同	東洋	
行書	同	林石峰		草書	同	皆川筇齋	
蘭菊競芳圖	同和歌	僧魯堂		竹石圖	同	吳月溪	
春郊歸牧圖	浦	浦埜青葭		源賴政圖	同	崖蘭齋	
墨竹	同	鈴木栖鳳		嵐山圖	同	佐久間艸偃	
人物圖	泉 和 田 岸 貞 塚	德齋	┌ 3ウ	蓬萊島圖	同	山脇廣成	
梅莊春晴圖	同堺	僧破墨		溪山暮靄圖	同	山辺雪居	
花鳥圖	南都	菊谷葛陂		山水圖	同	鳥羽石隱	
春花翠鳥圖	同	瀧艸山		秋景山水圖	同	竹溪	
仙人圖	同	藤月甫		寒林山水圖	同	小栗十洲	
人物圖	同	二 庵 漁月		人物圖	明石	岡田東虎	
自作詩	河州 三 日市	畠山仲子		旭鶴圖	同	大屋東拾	
山水圖	同	不動院	┌ 4才	菊花黃頭圖	淡路	幽蘭	
墨竹圖	同山田	田中三缸		金衣百子圖	同	今宮旭洲	
晴蘭圖	同	北小路靜古		朝天鷄唱圖	阿波 小 松島	松浦春舉	
行書	同	岩本玄昭		秋景双鹿圖	同	松島春山	
洞寶像	同	僧一溪		寒山行旅圖	同住吉	僧崔禪	
自作詩	伊勢 山	坂柳岡		美人圖	同中留	犬伏月虎	
秋林覓句圖	同	小俣栗齋	┌ 4ウ	月下帰漁圖	同徳島	堀三溪	童 十一才

林亭秋意圖

九鸞男

行書詩

梅田橋
西

大書

高津

雨中竹圖

平野町
二丁目

布袋圖

龍雲男

自作文

自刻印紙

鐘道圖

大藏寺前

秋景山水圖

淡路町二丁目
久太郎町
四丁目

行書 古硯銘

人物圖

島之内
木挽町

行書

天満信
保丁

秋江魚隱圖

同鈴鹿

葛洪煉丹圖

同六軒

梅花書屋圖

中之島

行書 自作詩

玉水丁

篆書

堂島中
三丁目

藤蟹洲

名知雄
字子錦

西孟鶴

十三童
字子雲

僧洞龍

自性院
名恭住

佐野龍雲

名義治
任法眼

椋光齋

名華得

三村岷山

名其原
字伯達

三浦雄齋

名忠義
字知郷

勝山花王

名朝秀

法橋幽篤

其日菴

名尺丈

丹波奈溪

名壽

中山支山

字太龍

牧小隱

名憲

寺本春丘

俗稱定吉

中井春谷

廣玉潭

名履道
字公祖

谷口菱々

名莊
字子康

15ウ

堂上白頭圖

本町一丁目
目杜小路

柳幕觀書圖

天満金
屋町

行書 自作詩

布屋町

陸羽煮茶圖

塩町三丁目

梅月圖

吳服町

花鳥圖

平野町
二丁目

寒江獨釣圖

順慶町
初瀬丁

楚蓮香圖

雨替町
四丁目

右隨所齋先後立次第不敢論巧拙也

宮本君山

名瓊
字伯鳳

18ウ

丙寅春二月十二日欲會群賢於北野大融寺且豫求四方諸名流得其墨藩而粘之四壁狂呼膝薄於其煙雲蜚動之下以罄一日之歡豈唯人間再快樂耶諸佛亦應點頭微笑耳仍錄其尊姓大號以爲小冊流傳于世亦但翰墨結緣非敢傲月旦之顰

浪華君山宮瓊識

刷印〈君〉

刷印〈山〉

19ウ

裏見返し

19ウ

19ウ

浪花近在之部

草書 自作詩

曾根寄村

同

島釣村

石礪書隱圖

小松村

會補

溪山幽遠圖

天満鈴鹿丁

米山人

名國
字士彦

17ウ

書型 縦一四・三糧 横八・八糧

(D) 文政八年秋展觀目錄

(1) 書誌

表紙 原表紙。共紙表紙。

外題 無し

内題 「追薦展観畫目」

構成 全一八丁（本文一六丁、劣齋文章二丁）

見返し 無し

序文 無し

跋文 劣齋文末「文政八年立冬旦／平安劣齋奥^之基識」

匡郭 無し

罫 無し

丁付 無し

挿絵 無し

印 無し

(2) 翻刻

追薦展観畫目

奥文煥輯録

月下梅花圖併題詩

山嬰桃圖

獨鶉來紅

墨梅

小倉前中納言藤原豊季卿
豊□大藏卿藤原治資卿（註1）
浪華
長山孔寅
池瓢庵

1 才

暗月叫鵲

危峰獨立圖併題詩

淡彩山水

葡萄

後赤壁賦

敗荷聚蟲

竹裡館

小野小町老後乞丐

傳家寶載驢看車漢詩意

茂松雙猿

楸莢竹林鳥

騰龍捲浪

養老飛泉

伶官合奏

雲山高塙

壽老人

野航渡雨

着色花鳥

富嶽

秋山曉霧

水禽游月

秋山蕭寺

没骨秋荷

馬場寅（註2）

頼山陽

僧月亭

東都
谷文晁

在江戸
東洋

在江戸
小田百谷

藤井雪堂

西村中和

山口正鄰

龜岡規禮

河村琦鳳

白井華陽

山田龍淵

村上松堂

福天年

山本昌盛

木村春胤

僧義亮

岸駒

僧清亮

佐々木鳳儼

柴田義峯

小野湘雲

1 ウ

2 才

2 ウ

3 才

3 ウ

水芙蓉	三谷五雲	檀香梅栖雀	圓山應震
皎月清流	望月玉川	秋雨寒鴉	齋藤蘭亭
幽谷傳芳	中林竹洞	秋草野鶉	山本探淵
高雄霜葉	矢野夜潮	墨蘭	世繼希仙
平語女院駭鹿	福智白瑛	催馬樂伊勢海唱意	原在明
秋溪幽榭	小栗伯圭	蘭草飛翹	^{伊勢} 岡村鳳水
喬木鳴湍	別所東溪	白菊	今井應祥
驢背觀瀑	邨田俊	飛蝶秋海棠	圓山應春
敗荷魚狗	^{東都} 龜交山	彈琴長嘯	吉田春山
觀音大士像	原在中	弦月鳴鹿	堀河雪江
秋草七種	梅戸在親	京極宗輔公吹笛	土佐光孚
澗上角鷹	多村舉秀	大伴旅人卿頽醉	土佐光清
秋山歸樵	狩野正瑛	野牡丹白鳩鳥	長澤蘆洲
蘆鴈	岸岱	張子房	速水春民
瀟溪愛蓮 ^(註3)	^{在紀伊} 長安松溪	淡彩山水	東寅
朝瞰海鶴	^{東都} 古川文館	雙雀長春花	長澤蘆鳳
着色巉巖木蓮	嶋田敏直	野豆蟋蟀	吉村孝敬
布袋和尚	森嶋和敬	彌猴採葦	中村春亭
山水	桂歸一	懸水騰鯉	田中日華
襟花獨鷗	駒井孝禮	柏樹獼猴	松田蘆山
塵尾老鼠	恒枝元章	陶靖節	岡本豊彦
溪山樓閣	僧月峰	水墨敗荷	橫山華山
柳堤遊客	細井俊民	空也緇侶賣茶筌	僧月靜
蕎花白鷺	圓山應瑞	菩提樹	松川龍椿
牧豎騎牛 ^(註4)	山口素岳	陶貞白聽松風	紀廣成

圓山應瑞 圓山應震
森 徹山 吳 景文

岡本豐彦 八田古秀
河村文鳳

右一幅先考七週忌辰田村壽秀君所懸
諸子薦了後遂囑于昌福寺今為其秘弄
故舊之情誼最可感矣再掲而佐追薦云

附録

追薦詩七絶一首
同七律一首 并引 清水雷首

同五絶一首 中嶋棕隱
同七律一首 并引 上田蘭畹

同詩餘一首 百百漢陰
同七律一首 并引 山路知足庵

同聯行書 木寺士敬
同七律一首 并引 松元研齋

追悼倭歌一首 并引 垣本雪臣
同一首 在浪花

同二首 浮田一蕙
同一首 并引 八幡 齋藤季吉

題畫和歌二首 大堀正輔
同一首 養老館鮒主

達磨畫 并 和歌一首 加茂季鷹
尾張 岩田田鶴磨

竹取物語 浮田一蕙

楊太真圖併題 長門 別府千賀女

今茲乙酉冬丁先兄文鳴君十三
週忌辰姪 文機 與及門諸子相謀

卜九月十七日開筵于東山多福庵
掲遺蹟數幅以代靈幃且請舊盟
諸畫伯之新裁展列薦之席間

亦炊拌染將以慰其靈各家所賜
上自搢紳諸公下及他州地名之藻
匠寄贈幾到為幃加之詩賦国風

雲鳥滿堂金言堆案眩輝不
勝稱其夥本日本來賞者又以千
教實是一時之壯觀追遠之嘉

奠先靈豈不欣然哉 之基 所佐
斯舉還福之所波及不為不多
矣乃命 文機 錄所獲之書目普

告同好以抑感喜之情云
文政八年立冬旦
平安劣齋奥 之基 識

裏見返し
18ウ

註

1 虫損のため判読できず。

16ウ

17才

17ウ

18才

- 2 虫損のため判読できず。
- 3 この箇所「濂」の字、さんずいの右に「廉」という字。
- 4 この箇所「豎」の字の「又」の部分は「父」と表記されている。
- 5 この箇所「嫩」の字の「父」の部分は「欠」と表記されている。

前号掲載拙稿「相見文庫蔵『新書画展観目録』翻刻と解題（上）」には、意味のない空欄（脱字）がある。それは、編集の際のデータ授受の過程で、外字及び複雑な文字（異体字や略字等）が表示されなくなったり、他の文字に置き換えられたりしてしまったために生じたものである。それに気づかぬままの出版となってしまうた。ここにその箇所すべてを訂正する。なお、煩雑になるので訂正文字の一々は指摘せず、関連する箇所全体を掲載した。

一 寛政期の書画会と目録

58 頁・上段・寛政六年の項

書画展観品目名字録首引

芸事以^レ雋^{ルヲ}為^レ選^ト。而シテ不^レレバ観^ニ之^ヲ於其ノ聚^ニ、則チ靡^三以テ昭^ニラカニスルコト其ノ雋^{ルヲ}焉。且也。巧者ハ可^ニシ以テ鑑^ニミル拙ヲ。拙者ハ可^ニシ以テ効フ^レ巧ヲ。是レ余之所^三以テ勸^ニムル書画家相聚^{ルヲ}。

之ノ志是ヲ以テ地無^レク分^ニツコト遠近^一ヲ、人無^レシ論^ニズルコト齡爵^一ヲ。業与^ニ不業^一、皆各以^ニテ其ノ所^一レ作^ル駢^ニ列ス一堂之上^一ニ。而シテ其ノ月旦品評任^ニセテ之衆目^一ニ而優劣自^ラ分^ニル乎不言之中^一ニ矣。此レ又其ノ衆所^ニノ相聚会^一スル之本志也。甲寅仲秋五日始会^ニス於洛東双林寺^一ニ。其ノ所^ニノ駢列^一スル書画凡ソ五十幅。今標^ニ其ノ品目名字^一ヲ以テ識^ス其ノ盛ナル事ヲ於他日^一ニ。如^ニ余ガ拙作^一ノ乃チ亦所^レ謂^フ請^フ自^レ隗始^ル者耳。

（文化十三年序『淇園文集』前編卷六）

三 翻刻

（A）寛政八年展観目録

62 頁・上段（3 才）

・ 隸書菅公画像詩 絹本

上田蘭畹 （巻五） 伊豫守

63 頁・上段（7 才）

・ 水墨竹 并詩 絹本

僧玉潏

63 頁・下段（8 才）

・ 着彩八仙圖

片山華岳 称周庵

（9 才）

・ 行書杜詩 七律

小島牧卿 称典膳 墨華王府士

（9 才）

・ 着彩華鳥 絹本

源波響 松前藩 執政

64 頁・上段（12 才）

・ 草書山水詩

馬暘谷 國部文学

(13ウ)

・墨竹 絹本

65頁・上段 (16ウ)

・行書美人圍碁詩 五律

(18才)

・水墨柳鷺

66頁・上段 (21ウ)

・楷書枯柳詩 七律

(B) 寛政九年展観目録

67頁・上段 (1才)

・草書五大字 以文常會友

・水墨雪梅 絹本

(1ウ)

・淡彩雨後山水

67頁・下段 (2ウ)

・方尺摹印 隸書題詩

(3才)

・草書二行

68頁・下段 (7才)

・丹書書窓吟

(8ウ)

・淡彩黃鸝哺雛圖

69頁・上段 (10才)

安默卿 江州人
五瀨門人

太田玩鷗 淀文学

栗山嵐谷 称茂助

伊藤君嶺

皆川淇園 〔朱〕中立賣 〔朱〕欄文蔵
〔平安文学〕

可觀堂 〔朱〕標馬場錦 称岸雅樂助
〔朱〕蘭齋

西村南溪 〔朱〕三条藤 称長左衛門
平安人

織田岐山 称縫殿助

東城仲連 松本門人
称恭蔵／三河人

海吉王 〔朱〕東洞御池 柚木門人
若藩眼医官

白芝山 〔朱〕四条東洞 淡路人
在平安

・艸書三行

・着色牽牛花螭娘圖 絹本

71頁・上段 (17才)

・行書山水詩 并画

・行書柳邊聞鶯詩

(18才)

・行書雨後春望作

・艸書柳邊聞鶯詩 并画

(18ウ)

・行書花岸泛舟詩 并画

・行書竹牡丹詩

・行書春郊晚歸詩

71頁・下段 (20才)

・楷書水邊垂柳詩

(20ウ)

・行書遊嵯峨詩

72頁・上段 (21才)

・雪竹

(22ウ)

・掌檢 蘭畹 大江成美 君山

江蘭畹 上田伊豫
守

橘公遵 圓山門人
称金次郎

早崎伯機 名之衡
浪華人
重出

三雲仙嘯

近藤龜峰 名幸篤勢州
龜山侯太夫

紀竹堂 重出

僧玉潏 重出

永田尚華 名喜實
加納人

朝倉荊山 名璵
平安人

藤士簡 名易
平安人

大田玩鷗

僧玉潏

(たなべ なほこ・九州大学大学院博士後期課程)